



撮影場所 米沢市営人工芝サッカーフィールド

1級審判は現在全国に約160人（山形県には取材日時時点で2人）。「身体が動く限りは審判員を続けていきたいです」

選手と一緒に試合を作る 勝利なきアスリート

審判員。スポーツに無くてはならない存在ですが、中立的ゆえに勝利の栄光から遠く、判定に批判を受けることもあります。何を考え、なぜ審判を務めるのでしょうか。

野堀さんが審判員に興味を持ったのは中学3年生のとき。試合を制御するのが楽しいと感じ、直後に4級審判員の資格を取得。そして、2015年12月（当時28歳）に1級の資格を取得しました。

現在はJ2リーグの主審を中心に、ほぼ毎週審判員を務め、年間40〜50試合に出場。サッカーの審判員は運動量が多いため、普段のトレーニングや飲酒制限など体力づくり・健康管理は欠かせません。

——審判員のやりがいとは？

「試合中、選手が感情的になることもあります。その時に注意や警告をして、冷静になってもらって、無事に試合が終わったときはやりがいを感じます」

——試合中は何を意識していますか？

「一番は、顔に出さないことです。選手は審判の表情にかなり敏感で、判断に迷ったときなど『しまった』と顔に出すと、余計にヒートアップしてしまうので」

—第15回—

のぼりけいすけ 野堀桂佑さん

（松が岬）

36歳。サッカー1級審判員。愛知県出身。米沢には、高校サッカーのコーチとして移住。普段は教員として生活。

——今後の目標をお願いします。

「どんな試合でも任せてもらえる審判員になりたいです。例えば、リーグ戦の優勝が決まるようなデリケートな試合でも、野堀なら任せられる、みたいな」

——読者に一言！

「批判されることもありますし、実際難しい仕事です。でも、試合終了の笛を吹いたときの達成感はずいぶんです。ぜひ、審判員に興味を持ってもらえると嬉しいです」



取材時、社会人チームの試合の審判をしていただきました